

# jdzb echo

## ベルリン——日本を歓迎する学術都市

ギュンター・シュトック (Professor Dr. med. Dr. h. c. Günter Stock)

今をさかのぼること350年前(1661年)、ブランデンブルク辺境伯フリードリヒ・ヴィルヘルム大選帝侯が宮殿内に設け、一般大衆の利用にも提供したプライベートな図書室が、現在のベルリン国立図書館(プロイセン文化財団所有)の前身である。その50年後、すなわち今から300年前にブランデンブルク選帝侯学術協会の定款が作成された。同協会の公式な設立はその10年前(1700年)だったが、定款完成後はじめて設立趣旨に従う事業に着手することが可能となった。これがプロシア学術アカデミーの母体であり、現ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーにいたるまでその歴史は綿々と続いている。同じく300年前にさかのぼる歴史を有するのがシャリテ病院である。同病院は、1710年にペスト患者の隔離病院として設立され

たが、幸いにも恐れていたペストの流行にいたらず、軍医教育研修の病院として利用され、今ではヨーロッパでも有数の大学附属病院として名声を博している。そして今から200年前(1810年)にはヴィルヘルム・フォン＝フンボルトの大胆な企画を基に、「研究、教授、学問の場」としてのベルリン大学(現フンボルト大学ベルリン)での講義が開始され、世界各地の多くの大学創立の模範となった。この関連で最後に挙げるのが、今から100年前(1911年)に創立されたカイザー・ヴィルヘルム協会である。同協会は、大学や学士院以外の組織において新たな領域における特定研究を進める意図で設けられ、現在マックス・プランク学術振興協会として事業を継続している。

ベルリンおよびブランデンブルクの学術史上重要な契機となった年の百周年記念、二百周年記念等が5件重なる2010年を「学術年」として祝い、市民とともにベルリン・ブランデンブルクの魅力的な学術史を振り返る契機とするのは自然の成り行きである。また、本地域の近未来を構築するためには学術および研究において卓越したポジションを獲得する必要があるが、「ベルリン学術年」はそのために未来に向けて力を蓄え、ベルリン市民の協力を求める機会ともなる。

19世紀から20世紀初頭にかけてベルリンの大学、学士院、シャリテ病院の間には目標指向的な協力関係および人的ネットワークが存在しており、その活動は市民社会から得られる理念のおよび財政的な



2010年サッカー・ワールドカップ(W杯)南アフリカ大会で日本対オランダ戦が開催された6月19日に、ベルリン日独センター恒例のオープンハウスを開催しました。館内の大型スクリーンで試合観戦する人、立方体万華鏡キューモス作りのワークショップに参加する人、着物の説明・着付け・ファッションショーからなる着物デモンストレーションを楽しむ人、映画「男はつらいよ・寅次郎真実一路」を観賞する人をはじめ、折り紙講座、生け花のデモンストレーションと作品展示、指圧デモンストレーションなどに今年も大勢の観客が訪れました。

### 目次

巻頭寄稿文	
ベルリン——学術都市	
ギュンター・シュトック	1~2
インタビュー	
ヒトとロボット	3
人的交流事業	
ヤングリーダーズフォーラム	4
人的交流事業	
ジャーナリスト欧州招聘事業	5
事業報告	6
2010年事業計画	7
ベルリン日独センター活動紹介	8

力強い支援に裏打ちされていた。その結果、ベルリンは学術および医学の中心地としての成果を得、当時の学界の趨勢は現在なお語り継がれるほどである。この名声は、シュタインの改革【1807年から1808年のプロイセン王国首相ハインリヒ＝フリードリヒ・フォン＝シュタインによる広範におよぶ「上からの近代化」政策】に端緒を見る首尾一貫した戦略的な政策の成果であった。

我々の行動の原動力は昔も今も「競争」および「協力」である。ベルリン・ブランデンブルク内の全ての学術機関の協力を得て、全地域で祝う2010年「ベルリン学術年」は、過去・現在・未来を内省し、意識的に考察するための多様な可能性を開く。

そしてまた、このような回顧活動を通じて、数百年前には存在していなかった全く新しい学術領域が、学術首都圏ベルリン・ブランデンブルクに誕生したことにも気づくであろう。その一例が日本学および日本研究である。シャリテ病院を中心に長年ドイツに滞在した森鷗外の影響が医学の分野を超えることは、周知のことである。

ベルリン日独センターは、ドイツ連邦議会がドイツの首都をボンからベルリンに

移転することを決定する以前にベルリンに創立された財団である。すなわち、ベルリンがドイツの首都だからベルリンに設立されたのではなく、19世紀以来緊密な日独関係が存在する故にベルリンに存在しているのである。これは、2010年「ベルリン学術年」にベルリン日独センターの参加を要請するに足る十分な理由と考える。



ギュンター・シュツック

ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー総裁、ベルリン日独センター友の会理事長



「ベルリン学術年」の公式登録イベントとして実施した日独会議『日独における高等教育改革——共通の課題、協力の契機』、2010年5月17日～18日（主催機関：ベルリン日独センター、ドイツ大学学長会議（『H R K、ボン）、国公立大学団体国際交流担当委員長協議会（J A C U I E、東京）（写真提供：ワイゲルト）

『jdzbecho』読者の皆様

皆様ご存知のように、ベルリン日独センターは今年で設立25周年を迎えました。四半世紀にわたり、日独学術・文化交流の精力的なフォーラムとしての事業を続けて参り、学者、研究者、文化人、アーティスト、政治家、実業家、企業家、ジャーナリスト、学生等数え切れない方々をシンポジウム、ワークショップ、セミナー、展覧会、コンサート等にお迎えすることができました。ベルリン日独センターは設立当初よりヨーロッパとアジアも事業に取り込み、国際的な知的交流の場となるべく努めて参りましたが、この25年を振り返ると感謝の気持ちに満ち溢れると同時に、若干の誇りの念も湧いてきます。

ベルリン日独センター設立25周年を祝う事業の一つとして、来る10月20日にヘルムート・シュミット元首相を迎えて記念講演会を開催する運びとなりました。シュミット元首相は経済財務相当時より日本と緊密な関係にあり、政界を退いた後も講演会や国際会議の折に度々日本を訪れています。なかでも高松宮殿下記念世界文化賞の国際顧問としての活動は特筆に価するでしょう。また、シュミット元首相と福田赳夫元総理との親交は広く知られています。

シュミット元首相は日独関係ならびに両国の隣国（中国、ロシア）との関係を中心に、両国の起伏に満ちた困難な歴史から現代に通じる教訓について語る予定です。

マティアス・ナス (Matthias Naß)  
ベルリン日独センター副総裁、『DIE ZEIT』  
紙副編集長

#### jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙『jdzb echo』は四半期毎（3月、6月、9月、12月）に刊行されます。

発行：ベルリン日独センター (JDZB)  
編集：ミヒャエル・ニーマン  
E-Mail: mniemann@jdzb.de

本紙『jdzb echo』はPDF版をホームページからダウンロードすることも、eメールでの定期購読も可能です。

連絡先：  
Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)  
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany  
Tel.: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220  
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書室の開室時間は月曜日と木曜日午前10時～午後4時、水曜日正午12時～午後6時です。貸し出しサービス実施中!

友の会連絡先: freundeskreis@jdzb.de



ベルリン日独センターは、2010年12月初めにヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルト・アム・マインおよび国際交流基金(東京)、日本学術振興会(JSPS)と協力して日独シンポジウム『異なる文化視点から考察するヒトとロボットのインタラクション』を開催します。本シンポジウムに向けて、本紙はヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学日本学部助手のコージマ・ワグナ氏(Dr. Cosima Wagner)にインタビューしました。

編集部: 1980年代に日本で産業用ロボットが導入されて以来、ドイツは日本におけるロボット人気を認識するようになり、その現象に関する議論を重ねてきましたが、1990年代終盤以降、同議論が再燃しています。そこでは江戸からくり人形に端を発し、日本のポップカルチャーにおけるヒーローとしてのロボット、そして「The Japanese Way of Robotics」【日本がパートナー・カントリーだった「ハノーバー・メッセ2008」において日本のロボット技術を歴史的なものから最新のものまで展示したジェトロの広報ブースの名称】にいたるまでの「ロボット大好きな国民性」といった短絡的なテーゼが繰り返し用いられますが、この傾向をどのようにお考えでしょうか。

ワグナ: これは、日本のイメージ・キャンペーンの結果と捉えることができるでしょう。「日本人は外国の技術を模倣するだけで、独自の技術を開発しない」という非難は昔も今も外国が日本に対して発する批判ですが、これに対抗するために日本の機関や組織が「ものづくりの伝統」を強調するようになりました。ロボット製作やロボットを容認する社会環境も、「ものづくりの伝統」の一環として位置づけられています。しかしながら、日本人が何百年も前からロボット好きな国民だったとするのは「創られた伝統」【エリック・ホブズボーム(Eric Hobsbawm)およびテレンス・レインジャ(Terence Ranger)共編の『The Invention of Tradition』(創られた伝統、1983年)から】に過ぎません。

江戸からくり人形を文化学的見地に基づいて分析した結果、これが江戸時代の高度精密機械であったのが、明治時代に入ると忘れ去られ、歴史学者の立川昭二が漸く1969年に蔵や民芸館や郷土博物館に眠っていたものを「再発見」したことを明らかにしたのが私の博士号請求論文『Robotopia Nipponica – Recherchen zur Akzeptanz von Robotern in Japan』(ロボットピア・ニッポニカ——日本におけるロボットの需要)です。

編集部: 日本政府は既に2002年に、支援ロボットを活用する将来社会像を視座に据えた一連の措置を導入しています。反対にドイツでは、高齢化社会の技術面での解決策としてのパートナーロボットの導入を非常に批判的にみており、製造現場以外におけるロボットの有用性につき極めて懐疑的に考察されています。日独社会間で、ロボットの受容および利用に関してこれだけの相違が生じる文化的理由は何でしょうか。

ワグナ: ドイツでは、マン・マシーン(人間と機械)の関係に関する精神思想史的な伝統、中

でもゴーレム【ユダヤ教の伝承に登場する自動泥人形】、フランケンシュタインの怪物、そしてカレル・チャペック(Karel Capek)の1921年刊行の戯曲『ロッサム万能ロボット会社』等に登場する「人間がロボットを造る、ロボットは人間を殺す」という極めて否定的なパラダイムが大いに影響しています。

これとは異なり日本では、とりわけ1950年代にロボット文化が台頭し、ポップカルチャーや若者文化において重要な比重を占めました。一番人気のロボットは手塚治虫原作の少年ロボット「鉄腕アトム」で、人間の味方で正義感の強いアトムは、西洋では「アストロボーイ」という名で知られています。本田技研工業のASIMO(アシモ)の開発者をはじめ日本の多くのロボット・エンジニアは、鉄腕アトムをはじめとする1950年代のロボットにインスピレーションを得たと語っています。

第二次世界大戦の敗戦後日本政府は、国民に繁栄をもたらす重要な役割を技術に見出すとともに、諸外国に対して自国の強さを証明するツールとして自国の技術力を大々的に演出するようになりました。その顕著な例が1970年開催の日本万国博覧会(大阪万博、EXPO'70)および2005年日本国際博覧会(愛知万博)で、いずれの場合もハイテク国家日本を代表するシンボルとしてロボットが選択されています。ここに文化と技術、そしてそれ等の政治的利用の見事な融合がみられます。

編集部: ヒトとロボットの協働社会において、倫理的・法的な問題が生じるでしょうか。

ワグナ: 12月に開催する日独シンポジウムでは、さまざまな問題を取り上げる予定です。たとえば、介護支援ロボット等を用いることで人間同士の触れ合いが損なわれる危険性があるか、あるいはその反対で、介護労働の軽減化によって人と人の絆が深まるのか。技術の多用に伴い、それに係わる人間の監視を強化する必要があるか。事故発生時の責任はメーカー、ソフトウェア開発者、ユーザーの誰が負うのか。このように、さまざまな視点からアプローチする予定です。

編集部: 高齢化の進む産業社会の問題解決に、ロボットが貢献できるとお考えですか。

ワグナ: 個別ケースでは、ロボットが役に立つでしょう。ドイツでも日本でも、年齢相応に健康で、自立的で、ライフクオリティーの高い生活をおくるための支援システムは進捗しています。



しかしながら、十分に洗練された、市場性のある支援ロボットは未だ少なく、研究開発を進める必要があります。

編集部: 日常生活においてロボット技術が巧く利用されている具体例が日本またはドイツにある場合は教えてください。

ワグナ: 数は少ないですが、中でも有名なのが日本製のアザラシ型メンタルコミットロボット「パロ」で、これは世界各地で認知症患者や自閉症児の施設でセラピーに用いられています。あるいは食事支援ロボット「マイスプーン」、歩行障害者用のロボットスーツHAL、そしてフラウンホーファー応用研究振興協会所属生産技術オートメーション研究所(IPA)が開発した家事支援ロボット Care-O-bot 等があります。

編集部: 日独の社会において、経済性を考慮しつつ、社会文化的に容認可能な形で人間と機械の協働を最大限に活用するにはどうしたら良いでしょうか。

ワグナ: 技術を開発・促進・販売する側と、技術を利用する側の間で緊密な対話を持つことが必要不可欠です。学門の世界では、自然科学と人文科学の対話が重要であり、政治の役割としては、メーカー、消費者、社会福祉機関(高齢者施設、社会福祉団体、他)との対話を可能にするということです。この関連で日独を比較することを通じ、外国の例を参考にしたり、技術に対する国内の受容姿勢を省みたりする契機となります。12月の日独シンポジウムは、日独の学者、研究者が学際的・超文化的に出会い、上述問題を掘り下げて討議する初の素晴らしい機会となるでしょう。

日独ヤングリーダーズフォーラム  
2010年度サマースクール『核兵器の拡散  
防止および核の民需利用』

オリヴァー・マイヤー (Dr. Oliver Meier)  
およびゲッツ・ノイネック (Prof. Dr. Götz  
Neuneck) ハンブルク大学平和・安全保障  
研究所 (www.ifsh.de) 研究員

ベルリン日独センターとロバート・ボッシュ財団が共催する日独ヤングリーダーズフォーラムのサマースクールは、今年で5回目を迎えた。本年度は「核軍縮を促進し、核兵器拡散を防止し、核エネルギー利用に際する責任ある姿勢を促進するために日本とドイツはどのような方策を講じ得るか」という設問を中心に据えての開催である。私たち筆者はサマースクールのセミナー部門の企画・指導を担当した。

6月26日から7月6日にかけて開催されたサマースクールに参加した日独同数で総勢16名の若手指導者は、核エネルギーの民需利用および核兵器コントロールに係わる問題に向き合った。核軍縮に関する日独の見解は一致しているが、核の民需利用に関して日本が拡大派なのに対し、ドイツは原子力発電から撤退することに固執しており、日独間で正反対のポジションがみられる。故に、核問題は日独間で討議するに相応しい実に魅力的テーマといえる。

サマースクールは、ポツダム開催の四日間のセミナーで始まった。核拡散防止条約の履行、核エネルギーの軍事利用と民需利用の間の緊張関係、「原子力カルネサンス」の影響、核エネルギー利用を通じて地球温暖化を抑止する可能性、と実に多彩な内容の基調報告が政界、経済産業界、学界を代表する要人や専門家によって発表された。ほとんどの場合、日独一人ずつの専門家が基調報告ないしは同報告に対するコメントを担当し、それに基づいて全体討議を開き、議論を一層掘り下げる事が可能だった。

また、駐独日本国大使およびドイツ連邦外務省の軍縮・軍備管理担当者と面談する機会も得、さらにはハインリッヒ・ベル財団の公開討論会『グローバルゼロか核アナーキーか——核拡散防止条約再検討会議終了後』に参加し、セミナーでの議論をさらに発展させることが可能だった。それと同時に文化にも目を向け、ベルリン



の屋外コンサート場ヴァルトビューネでクラシックコンサート鑑賞やポツダム市内の視察観光だけでなく、全員でカレーソーセージを食べながら南ア開催のサッカーW杯の実況放映を楽しむことも、セミナーでの学習同様に、互いの知己を深める機会となった。

サマースクールに参加した若手指導者は経済産業畑の者もいれば、研究者、ジャーナリスト、政策決定者と多様で、中には核問題に係わる者もいれば、核に関してはほぼ素人に近い者もいた。したがって、セミナーを企画・指導する際に考慮すべき点が多々あった反面、異なるバックグラウンドから異なる視点で討議が展開されたことは、セミナー全体に効奏した。

セミナーの最終課題は、日独アクションプランの作成だった。参加者は豊かな創造力を基に、核エネルギーの責任ある取り扱いを促進可能な、極めて綿密な政策案を考案した。

セミナー終了後、過年度の参加者(いわゆる同窓生)22名と合同で、ドイツ連邦議会で開催されたディスカッションラウンドに参加し、在独日本国大使館の代表、90年連合・緑の党の議員、社会民主党議員のスタッフと討議・交流した。翌日も参加者と同窓生合同で、ベルリン日独センター開催の会合に出席した。サマースクールの最終

部は会場をウィーンに移し、日独の国連大使、国際原子力機関 (IAEA) スタッフ、包括的核実験禁止条約 (CTBT) 事務局長と面談した。

セミナーを企画・指導した立場からみて、本サマースクールは大成功だったと考える。参加者は皆学習意欲が高く、熱帯なみの高温にも耐え、安全保障、エネルギー、環境の各観点から核エネルギーの長所および短所を考察・検討した。その際、日独の核政策の共通点および相違点が頻繁に取り上げられた。討議の重点は核テクノロジーの悪用を阻止するための拘束力ある規則の意義、核テクノロジーを責任ある態度で利用する際の問題、核エネルギーのメリットとデメリットを秤にかけの際の問題点、にあった。また、国によって核の民需利用に関する視点が異なる点もオープンに取り上げられた。たとえば、「本来ならば核エネルギー自体に係わる論拠が勝るべきなのに、何故ほとんどの参加者は、核エネルギーに対する自国の視点に捉われ続けるのか」と最後に日本人参加者が正面きって質問したが、これは、政治家の肝に銘じてもらいたい問いかけだった。





## ドイツのイノベーション、日本のイノベーション

西川拓、毎日新聞科学環境部記者

「キーとなる技術の発明に成功しても、ビジネスで遅れを取る」

ロバート・ボッシュ財団の『日本人ジャーナリスト欧州招聘事業』に参加する前に早稲田大学で受けた事前セミナーで、在日ドイツ商工会議所のパスカル・グードルフ (Pascal Gudorf) さんが話していた。これは実は日本でもよく語られる悩みだ。「知の大競争時代」と言われる昨今、世界各国がイノベーションを巡ってしのぎを削っているが、科学技術を基盤に国を発展させてきたドイツと日本が同じような問題意識を持っているのを知って、6月7日から12日までのプログラムに一層の興味が湧いた。

日本では主として科学技術政策や高等教育 (人材育成) 政策を担当してきた筆者にとって、今回の取材の関心は二つあった。一つは、イノベーションを支える人材の国境を越えた争奪戦である。欧州の科学技術政策に詳しい専門家に事前に聞いたところ、ドイツは積極的に移民を受け入れ、海外の優秀な人材確保に成功しているということだった。どうすれば海外から多くの人材が来てくれ、社会がどうやって外国人を受容してきたのか。その辺りの話を実地で聞くことができれば、人材の国際化を進めようとしている日本にとって、大いに参考になると考えた。

この点、ベルリン日独センターのスタッフのおかげで、期待に沿った取材ができた。「人材の国際化」を旗印にドイツのエクセレンス大学 (技術・研究分野の推進モデル校) に選ばれたベルリン自由大学には、個別取材も含めて二日にわたって訪問させていただき、留学生のサポートを担当している「ウェルカムセンター」も見学させてもらった。

ベルリン自由大学は博士課程の学生の24%が外国人なのだという。欧州連合 (EU) 圏内からの学生が多いのかと思ったら、意外にも最も多いのはロシアで、トルコ、米国と続き、最近では中国からの留学

生が急増しているとのことだった。ウェルカムセンターでは、大学内外のさまざまな事務処理や申請書類の記入を手伝ったり、ドイツ語の集中講座を開いたりしているという話を聞き、留学生が学び、生活していく上で、こうした決め細やかなサポートが欠かせないと感じた。

また、ソーラーボートでの川下りで知り合ったベルリン工科大学の井上茂義博士からも、ドイツと日本の研究環境の違いについて、非常に興味深い話を聞くことができた。井上博士には無理を言って、後日、研究室にも訪問させてもらい、さらに詳しく取材をすることができた。井上博士はまだ20歳代の若さだが、フンボルト財団の研究資金を受け、年内にも自分の研究室を立ち上げるという。外国人の若者にこうした経済的な支援をためらわないドイツ科学界の懐の深さには大変な感銘を受けた。

筆者のもう一つの関心事項は、ドイツの脱原発政策の行方であった。地球温暖化が世界的なテーマになり、発電段階で温室効果ガスを出さない原子力発電への回帰が進んでいる。フランスや日本、ロシアなどの原発先進国は国ぐるみで新興国へ原発プラントを売り込むビジネスを展開している。シーメンス社がロシアのロスアトム社と協力関係を築くというニュースもあり、その中においてドイツ政府がどういう姿勢を示すのかは興味深い。こちらの方は、やや微妙な時期だったようで、政府の担当者やシーメンス社の担当者への取材は叶わなかった。しかし、アレバNP社のCEOとの電話インタビューが実現し、貴重な話を聞くことができた。

ベルリンではこのほか、シーメンス社のガスタービン工場を見学させてもらったことも印象に残っている。タービン技術は日本もかなり進んでいると思っていたので、シーメンス社で日本向けの製品が作られていると聞いて驚いた。経済技術省では、電気自動車の普及について担当の官僚



とかなり本音で意見交換できたことも、ありがたかった。

日帰りの強行日程だったが、ブリュッセルでは巨大な欧州委員会 (EC) 本部ビルに圧倒された。EUのイノベーション政策の全体像を聞かせてもらい、理解を深めることができた。夕食を食べる時間もなく、深夜、空腹でベルリンに戻ってアンドレア・ティッシャーさん (Andrea Tischer、ロバート・ボッシュ財団) やタチアナ・ヴォネベルグさん (Tatjana Wonneberg、ベルリン日独センター) たちと一緒に食べたベトナム料理「フォー」は忘れられない。

さて、ドイツと日本が共通して抱える「ビジネス下手」という大きな課題だが、初日のセミナーで、ドイツ側の出席者が「サムソンやノキアが何か新しいものを作ったか？」と発言したことが、ドイツの技術に対する自負を感じさせて印象深かった。イノベーションは時として経済的な価値ばかりが強調されるが、正直に言えば、科学技術がそのような文脈でのみ語られることに少々うんざりしている。今回取材した限り、イノベーション政策として目新しさはなかったが、「本物」を生み出し続ける科学技術の強さを大事にする姿勢に共感した。

最後に、興味分野のバラバラなジャーナリスト集団の身勝手な要求に応えることは並大抵ではなかっただろうと想像するが、有意義なプログラムを組んでいただいたロバート・ボッシュ財団、ベルリン日独センター、早稲田大学の皆さまに感謝申し上げます。

## 写真右

日独専門家会議『日欧産業デザインにおける新しいリゾナリズム』(2010年5月22日、於 ヴィトラ・デザイン・ミュージアム、ヴァイル・アム・ライン)において導入講演「産業デザインの地域再生」を行なう柏木博教授(武蔵野美術大学造形文化・美学美術史)。共催機関:国際交流基金、ヴィトラ・デザイン・ミュージアム



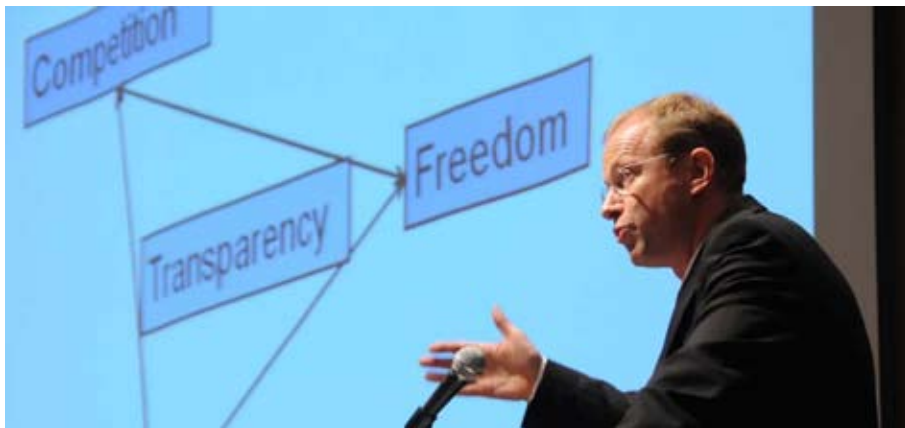
## 写真右下

国際シンポジウム『コペンハーゲン後の気候政策』(2010年5月28日、於ベルリン日独センター)。写真左から(敬称略)カーステン・ザッハ(Dr. Karsten Sach、ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉安全省)、小林出(経済産業省地球環境対策室地球温暖化対策交渉官)、スザンネ・ドレーゲ(Dr. Susanne Dröge、国際政治・安全保障研究所)



## 写真下

シンポジウム『欧州における市場経済の動向と日本への示唆——自由競争とセーフティネットとのバランスを探る』(2010年6月18日、東京開催)において導入講演を行なうミハエル・アイルフォート氏(Prof. Dr. Michael Eilfort、エバーハルト・カール大学テュービンゲン名誉教授、市場経済財団理事)。共催機関:経済広報センター、コンラート・アデナウア財団東京事務所。(写真提供:ジャパンタイムズ)



## 写真下

第100回ダーレム音楽の夕べ『ベルリン日独センター設立25周年記念コンサート』(2010年6月4日、於ベルリン日独センター)。演奏:ヤング・アジア・チェンバーオーケストラ・ベルリン(ベルリンを中心にドイツで活動中ないしは留学中の24名のアジア出身の音楽家による室内管弦楽団)。指揮:謝正鳴(シャ・セイオウ)。曲目:陳怡(チェン・イ)、アルノルト・シェーンベルク、ヴォルフガング=アマデウス・モーツァルト





## 会議系事業

### 天然資源、エネルギー、地球温暖化、環境

#### 日独ソーラー・デー

協力機関：フラウンホーファ応用研究振興協会東京代表部産業部、フラウンホーファ応用研究振興協会太陽エネルギーシステム研究所( I S E、ハイデルベルグ)、新エネルギー・産業技術総合開発機構(東京)、ドイツ連邦環境・自然保護・原子炉安全省(ベルリン)、ドイツ連邦教育研究省(ベルリン)(照会中)、経済産業省(東京)(照会中)

開催予定日：2010年10月5日、東京開催

### 少子高齢化社会

#### 日独シンポジウム『高齢社会における人材マネジメントおよび雇用政策』

協力機関：ドイツ経済研究所(ケルン)、ドイツ日本研究所(東京)、ドイツ連邦経済技術省(ベルリン)

開催予定日：2010年9月15日、ケルン開催

#### 日独シンポジウム『家庭に優しい企業政策』

協力機関：ギーゼン大学、筑波大学

開催予定日：2010年9月20日～21日

#### 日独シンポジウム『成年後見制度』

協力機関：日本成年後見法学会(東京)、ドイツ日本研究所(東京)、フリードリヒ・エーベルト財団(東京)、毎日新聞社(東京)、筑波大学法科大学院

開催予定日：2010年9月29日～30日、東京開催

### 学術振興を通じた社会発展

#### 日独会議『数学・自然科学教育の改善戦略』

協力機関：ベルリン自由大学、独立行政法人科学技術振興機構(J S T、東京)

開催予定日：2010年11月23日～24日

## 国家、企業、市民社会

### 日独シンポジウム『異文化交流の視点から見た人間とロボットのインターフェース』

協力機関：国際交流基金/ケルン日本文化会館、フランクフルト大学、日本学術振興会ボン事務所、名古屋大学

開催予定日：2010年12月7日～8日

### 講演

#### ヘルムート・シュミット元首相講演会『ドイツ、日本、そして近隣諸国』

会場：ドイツ銀行(ウンター・デン・リンデン社屋、ベルリン)

日時：2010年10月20日、午後6時開会

形式：非公開講演会(招待客のみ聴講可)

#### 宮田良平講演会

会場：日本国大使館(ベルリン)

日時：2010年11月10日、正午開会

形式：非公開講演会(招待客のみ聴講可)

### 特別事業

#### 『日独フォーラム第19回全体会議』

協力機関：日本国際交流センター(東京)

開催予定日：2009年11月12日～13日

## 人的交流事業

- ・若手研究者招聘プログラム
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・研修プログラム
  - 『日独青少年指導者セミナー』
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・日独高校生交流『たけのこプログラム』

各プログラムの詳細は『<http://www.jdzb.de>』→人的交流事業』

## 文化事業

### コンサート

#### ダーレム音楽の夕べ

2010年10月8日、19時30分開演：  
演奏会トリオの夕べ

2010年11月10日、19時開演：  
モナ飛鳥オットピアノリサイタル

2010年12月10日、19時30分開演：  
待降節・クリスマス演奏会

### 展覧会

#### 宮武貴久恵絵画展

開会式：2010年10月4日、19時開会  
展示期間：2010年10月10日まで

#### ヴェロニカ・シェーパス(Veronika Schäpers) 創作アーティストブック展覧会『がさごそ』

開会式：2010年10月14日、19時開会  
展示期間：2010年11月30日まで

#### エーファ・ピーチュカとオーラフ・ダールハウス(Eva Pietszcker und Olaf Dahlhaus) 木版画展

開会式：2010年12月3日、19時開会  
展示期間：2011年2月まで

### お知らせ

#### 金春座ベルリン公演

会場：世界文化会館(ベルリン)

月日：2011年1月19日および20日

演目：船弁慶、葵上

チケット販売：[www.hkw.de/komparu](http://www.hkw.de/komparu)

#### 展覧会の観覧時間:

月曜日～木曜日10時～17時

金曜日10時～15時30分

会場についてほかに記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。

詳しくは<http://www.jdzb.de>→個別事業



#### 写真上および左

ベルリン日独センター新事務所竣工式(1998年6月3日)において。写真左から順に:ベルリン日独センター総裁木村敬三元駐独大使、マンフレット・シュトルペ(Dr. Manfred Stolpe)ブランデンブルク州首相、中曽根康弘元日本国総理大臣、ウィルフリート・グート(Dr. Wilfried Guth)ベルリン日独センター評議会議長、久米邦貞駐独日本国大使、エアハルト・ケルティンク(Dr. Erhart Körting)ベルリン州法務庁長官、ユルゲン・ズートホフ(Dr. Jürgen Sudhoff)ドイツ連邦外務省大使



#### 写真左、上から順に

ノーベル賞受賞者大江健三郎氏と小説家で文学研究家の多和田葉子氏の討論会。司会はヴォルフガング・キッセル氏(Wolfgang Kissel) (2000年2月24日)

2003年10月開催のベルリン日独センター評議会第19回定例会議におけるウルリッヒ・カルテリエリ評議会議長(Dr. Ulrich Cartellieri、任期:2000年5月～2005年5月)および小塩節副議長(任期:1989年10月～2008年10月)

2000年度日独勤労青年交流プログラムの一環でベルリン日独センターを訪れた日本団



#### 写真下

パネルディスカッション『テロリズムとの闘い——日独の政治・文化的課題』(2002年7月2日、東京開催)で開会のスピーチに立つヨハネス・ラウ(Johannes Rau)ドイツ連邦大統領

